

論証的ポリフォニー理論の諸問題

西 脇 沙 織

はじめに

意味論、語用論、言語哲学の分野における最も伝統的で一般的な考えに則れば、文や発話は命題を表すとされる。そして、その命題の真理条件を明らかにし、状況に照らして真理値を判定する。例えば、授業に登録している学生が30人である状況で「全員が来た。」と言う場合、履修者30人が教室にいるかないかで真偽の判定ができるだろう。このような立場の代表者として例えばゴットロープ・フレーゲ (Gottlob Frege) をあげることができる。しかし、全ての文や発話が真偽判定可能な命題を表しているわけではない。例えば「窓を開けてくれ。」と言う場合、どのような命題が表されるのか、一見したところでは不明である。このような問題に対して、ジョン・L・オースティン (John L. Austin) は言うことによって遂行される行為 (主張、命令、依頼、謝罪…) がこそが意味であると考えた (Austin 1975)。

同種の問題について、オースティンのスピーチアクト理論とは異なる解決策を提案したのがフランスの言語学者オズヴァルド・デュクロ (Oswald Ducrot) である。例えば、重病で入院している人が手術を受けた後で、ひとかけらのパンを食べたとしよう。この状況で「少し食べた。」と言う場合でも、「ほとんど食べなかった。」と言う場合でも、どちらの発話も患者が一定量のパンを食べたといったような命題を表すが、直感的に両者の意味は異なるようにみえる。デュクロは独自に定義された「論証」という概念を導入することで両者を区別した。例えば、「少し食べた。」を論拠とした場合「病状は良くなるだろう。」という結論を導けるのに対して、「ほとんど食べなかった。」を論拠とした場合に導かれる結論は「病状は良くならないだろう。」といった正反対のものである。デュクロはジャン＝クロード・アンスコンブル (Jean-Claude

Anscombe) とともに言語内論証理論 (théorie de l'argumentation dans la langue) を創設し (Anscombe & Ducrot 1983)、次いで、その改良版としてトボス理論 (théorie des topoï) を示した (Ducrot 1988 ; Anscombe 1995)。これに対して、マリオン・カレル (Marion Carel) はトボス理論に対する批判から、言語内論証理論の徹底化である意味ブロック理論 (théorie des blocs sémantiques) を提示した (Carel 1992)。カレルによれば、客観性を装っているように見える発話であれ、自らの立場を公然と表明しているように見える発話であれ、感情を表出しているように見える発話であれ、すべての自然言語の発話は「p なので q」あるいは「pなのに q」といった論証的ディスコース (enchaînement argumentatif) と呼ばれる形式で表示可能な「視点」(point de vue) を表明する。論証文の形式で表示可能だとされるこれらの「視点」は、「なので」や「なのに」などの接続詞を含むため、真偽を問うことができないという点で主観的である。すなわち、あらゆる自然言語の発話の意味は客観的ではありえない。カレルによれば、あらゆる自然言語の発話の意味は主観的である。

ところで、デュクロは発話内容 (言われていること) と発話活動 (言うこと) を区別し、発話内容を記述するために「論証」の概念を用いた一方で、発話活動を記述するためには「ポリフォニー」という論証的でない概念を援用した (Ducrot 1984)¹⁾。カレルは発話内容を意味ブロック理論に基づいて記述し、発話活動をデュクロのポリフォニー理論 (théorie de la polyphonie) の改良版である論証的ポリフォニー理論 (théorie argumentative de la polyphonie) を用いて分析する。初期版の論証的ポリフォニー理論 (Carel & Ducrot 2009) では、論証的発話内容に論証的でないパラメーターを組み合わせることによって発話活動を記述した。これに対して、現行版の論証的ポリフォニー理論は、意味ブロック理論が発話内容を論証的ディスコースで記述するのと同様に、発話活動を論証的ディスコースで記述する (Carel & Ducrot 2014)。

発話内容のみならず、発話活動をも論証的に扱えるようになったことは、学派の進歩として一定の評価を与えることができるだろう。しかしながら、初期版のポリフォニー理論に関する日本語論文はいくつも存在するのに対して、現行版のポリフォニー理論は日本に十分に導入されているとは言い難い²⁾。本稿は現行版のポリフォニー理論を紹介し、アイ

ロニカルでない感嘆文の話者とアイロニカルな感嘆文の話者の発話活動についての考察を通して、その応用可能性と問題点を議論することを目的とする。本稿は3つのセクションからなる。1. では、現行版の論証的ポリフォニー理論の主要なポイントを整理する。2. では、現行版の論証的ポリフォニー理論を応用し、通常の感嘆文の話者の発話活動とアイロニカルな感嘆文の話者の発話活動の区別について論じる。両者は発話活動に関わる論証的ディスコースの性質の違いにより区別される。最後に3. では、2. において示す分析の帰結を議論する。言語的文脈、あるいは非言語的文脈と矛盾をきたすというアイロニー発話の内容については意味ブロック理論の枠組みにおいて分析がされていたが (Carel 2010)、新しい論証的ポリフォニー理論を援用すれば、「言うふりをする」(faire semblant de dire)、つまり信じていないことを言うというアイロニーの話者の発話活動についての分析も可能となりそうである。しかしながら、2. で示す仮説を一般化するためには現行の論証的ポリフォニー理論が提案する「受領」と呼ばれる概念の精緻化が求められる。

1. 論証的ポリフォニー理論³⁾

1.1 意味ブロック理論と論証的ポリフォニー理論の関係性

意味ブロック理論と論証的ポリフォニー理論はカレルが提案する意味に関する2つの理論である。意味ブロック理論は発話内容を記述するための理論、論証的ポリフォニー理論は意味ブロック理論の道具立てといくつかの固有の概念を使って発話活動を記述するための理論である。カレルは論証的ポリフォニー理論を意味ブロック理論の「下位分野」と位置付けているが (Carel 2021)、本稿の筆者には論証的ポリフォニー理論は意味ブロック理論の「延長」と捉える方が適切にみえる。「言われていることをどのように言うのか」を意味ブロック理論の道具立てといくつかの独自の概念を用いて記述するポリフォニー理論は、意味ブロック理論の延長である。また、本稿ではこれ以上触れないが、意味ブロック理論の道具立てを用いて「言われていることを言うことによってどのような行為が遂行されるのか」を扱うのが、カレルが近年構築中の「言うことによる行動の理論」(théorie des actions en disant) であり、こ

れは意味ブロック理論のさらなる延長であると捉えられる。

1.2 意味ブロック理論と「言われている視点」

意味ブロック理論は、発話内容を「言われている視点」(point de vue dit) すなわち、論証的スキーマ (schéma argumentatif) に結びつけられた論証的ディスコースによって記述する。論証的スキーマ (「スキーマ」とも呼ばれる) は $P \text{ DC } Q$ (〈P なので Q〉) もしくは $P \text{ PT } Q$ (〈Pなのに Q〉) の形式を取る。語句の規約的意味は論証的スキーマからなり、論証的スキーマは語句によって表現される。P、Q は任意の自然言語の表現、DC は「なので」など順接の接続詞、PT は「なのに」などの逆説の接続詞を表す。例えば、語「慎重」の意味は〈危険 DC 用心〉(「慎重」とは「危険なので用心する」ということ)、語「頭がいい」の意味は〈困難 PT 理解〉(「頭がいい」とは「難しくても理解すること」) である。論証的ディスコースは $p \text{ donc } q$ (「p だから q」) もしくは $p \text{ pourtant } q$ (「pなのに q」) の形式を取り、発話、つまり状況や文脈に関連づけられた文によって喚起される。p と q は自然言語の表現、donc は「なので」などの順接の接続詞、pourtant は「なのに」などの逆説の接続詞を意味する。例えば、発話「太郎は慎重だ。」は「危険があれば太郎は用心する」、発話「花子は慎重だ。」は「危険があったので花子は用心する」といった論証的ディスコースを喚起する。同様に、発話「太郎は頭がいい。」は「難しくても太郎は理解する」、発話「花子は頭がよかった。」は「難しくても花子は理解した」といった論証的ディスコースを喚起する。発話が喚起する論証的ディスコースは語が表現する論証的スキーマを肉付けする。別の見方をすれば、語が表現する論証的スキーマは発話が喚起する論証的ディスコースの骨組みである。例えば、発話「太郎は慎重だ。」の意味内容は「慎重」が表現する論証的スキーマ〈危険 DC 用心〉の具体化として理解される論証的ディスコース「危険があれば、太郎は用心する」からなる「言われている視点」によって記述され、発話「花子は慎重だった。」の意味内容は「慎重」が表現する論証的スキーマ〈危険 DC 用心〉の具体化として理解される論証的ディスコース「危険があったので、花子は用心した」からなる「言われている視点」によって表示される。同様に、発話「太郎は頭がいい。」の意味内容は「頭がいい」が表現する〈困難 PT 理解〉の具体化として

理解されるディスコース「難しくても太郎は理解する」からなる「言われている視点」によって、発話「花子は頭がよかった。」の意味内容は「頭がいい」が表現する〈困難 PT 理解〉の具体化として理解されるディスコース「難しくても花子は理解した」からなる「言われている視点」によって表示される。

以下、より詳細な事項をジャン・ラシーヌ (Jean Racine) の悲劇『アンドロマック』 (*Andromaque*) の 1 幕 4 場の分析 (Carel 2025) を通して見ていくことにする (下線部は本稿の筆者による)。引用するのは、幕開け後しばらくして見られるピリュスとアンドロマックのやり取りである。ピリュスはアキレウスの息子である。アキレウスはヘクトールを殺し、トロイア戦争の後、ピリュスは戦利品として、ヘクトールの妻アンドロマックとヘクトールの息子アステシアナクスとを手に入れた。戯曲の冒頭で、ギリシャ人たちは、ヘクトールの息子アステシアナクスが生き残ることを恐れていた。アステシアナクスが再び戦争を引き起こすのではないかと考えたからである。このような背景から、彼らはアステシアナクスを殺したがっていた。ピリュスはアンドロマックに恋をしていたため、アステシアナクスをギリシャ人たちに渡してアンドロマックを不幸にすることを選ぶか、アステシアナクスを庇護下に置き続けてギリシャ人たちに背くことを選ぶか、一種のジレンマに陥っていた。

Pyrrhus. Leur haine pour Hector n'est pas encore éteinte. / Ils redoutent son fils.

Andromaque. Digne objet de leur crainte ! Un enfant malheureux qui ne sait pas encor / que Pyrrhus est son maître et qu'il est fils d'Hector.

(Racine, *Andromaque*, p. 48)

ピリュス ギリシャの、ヘクトールを恨む心は、今以って消えてはいない。今恐れる相手は、その忘れ形見だ。

アンドロマック ギリシャの不安の種とは！ 不運な幼子、まだ御主君はピリュス様、しかも父はヘクトールと、それさえも弁えませんものを！

(渡辺守章訳『アンドロマック』 p. 37)

文脈を考慮に入れば、ピリュスの台詞の下線部が喚起する (évoquer)

「言われている視点」は次のような論証的ディスコースと論証的スキーマから構成されると考えられる。

Point de vue dit, *Astyanax est le fils d'Hector donc ils le craignent*,
compris comme formulant MENACE DC CRAINT

言われている視点。〈脅威 DC 不安〉の具体化として理解される
「アステアナクスはヘクトールの忘れ形見なので、ギリシャ人は
アステアナクスに不安を覚えている」

下線部に現れている語の「言われている視点」の構築における役割は同一ではない。動詞 *redouter* (「恐れる」) は規約的意味の中にスキーマ *MENACE DC CRAINT* (〈脅威 DC 不安〉) を含むとすれば (「危惧する」は「脅威のために不安を抱くこと」のように定義できる)、*redouter* (「恐れる」) は「言われている視点」の構築において、スキーマを表現する役割を果たしていると考えられる。他方、直接目的語として機能する名詞句 *son fils* (「その忘れ形見」) はスキーマを表現することはないが、スキーマに現れている語、すなわち *MENACE* (「脅威」) を論証的ディスコースの中で具体化するという点で、「言われている視点」の構築に関わる。主語となる代名詞 *ils* は論証的スキーマを表現することも、論証的スキーマに現れている語を具体化することもないが、論証的ディスコースの全体の完成に参与している。なお、スキーマに現れている語は同一の語によって肉付けされる場合もあれば、ピリュスの例でそうであったように、より個別的な語によって肉付けされることもある。後者の場合、論証的スキーマと論証的ディスコースの間には「ギャップ」(*décalage*) が存在する。

同様の方法で、アンドロマックの台詞の下線部についても分析可能である。

Point de vue dit, *Astyanax est un enfant malheureux donc ils le craignent*,
compris comme formulant MENACE DC CRAINT

言われている視点。〈脅威 DC 不安〉の具体化として理解される
「アステアナクスは不運な幼子なので、ギリシャ人はアステア
ナクスを不安の種とみなしている」

ここでは、digne objet de leur crainte (「ギリシャの不安の種」) という語句がスキーマ MENACE DC CRAINT (〈脅威 DC 不安〉) を表現する (「脅威があるので不安を抱く」とも「脅威がないのに不安を抱く」とも言えるが、digne objet de 〈『値する』〉はギリシャ人が「脅威があるので不安を抱いている」ことを限定する)。表現されるスキーマはピリュスの例と同じだが、喚起されるディスコースは異なる。アンドロマックの例では、スキーマに現れる語 MENACE (「脅威」) をディスコースにおいて個別化する役割を担う語句は son fils (「その忘れ形見」) ではなく un enfant malheureux (「不運な幼子」) である。この肉付けの不合理性はアンドロマックの台詞の下線部の「言われている視点」内部に矛盾を生じさせる。アンドロマックの台詞の下線部はアイロニカルに解釈される。ピリュスの例においてそうであったように、通常のギャップは特別な効果を生まないが、スキーマに現れる語とディスコースにおいてそれを個別化する語の間のギャップが矛盾をきたすとき、すなわち「不合理なギャップ」(décalage absurde) となるとき、アイロニーが生じるとされる (Carel 2010)。なお、「言われている視点」の構築には上に示したように、スキーマとディスコースの両方が与えられる「論証的解読」(décodage argumentatif) とディスコースのみ喚起され、語の意味に導かれながら聞き手や読み手が一定の自由のもとでディスコースにスキーマを結びつける「論証的解釈」(interprétation argumentatif) とが存在する。この区別については、本稿の議論に用いないので、これ以上触れないことにするが、西脇 (2026) に日本語の解説がある。

1.3 論証的ポリフォニー理論と「示されている視点」

論証的ポリフォニー理論は、発言主体 (sujet parlant= 実際に発話をする人) と話者 (locuteur= 発話の責任者) を区別したうえで、話者の発話活動を意味ブロック理論の概念である論証的スキーマに結びつけられた論証的ディスコースを用いて記述する⁴⁾。発話内容に関わるスキーマとディスコースが「言われている視点」と呼ばれるのに対して、発話活動に関わるスキーマとディスコースは「示されている視点」(point de vue manifesté) と呼ばれる。発話活動の定義は学派によって大きく異なるが、論証的ポリフォニー理論の枠組みでは、発話活動は発話に対する話者の関わり方を表す「構想」「発見」「受領」という3つの発話

モード (mode énonciatif) とさまざまな発話トーン (ton énonciatif) の組み合わせからなるとされる。少々乱暴に言ってしまうと、「言われている視点」はいわゆる「命題」にかわる概念、「示されている視点」はいわゆる「命題態度」にかわる概念である。「示されている視点」は発話モードと発話トーンを明らかにするという点で、発話活動の性質を明らかにする。すなわち、「示されている視点」とは発言に関する「メタコメント」なのである。

「構想」(mode du conçu) はバンヴェニスト (Émile Benveniste) がいうところの「ディスクール」(discours) に近いモードである (Benveniste 1966)。「構想」モードの話者は発話活動に強く関わる。「構想」とは、話者である「私」(je) が何かを「言う」存在として現れるモードである。発話モードが「構想」であることを明らかにする論証的ディスコースは je dis (「私は言う」) を含み、またそれが具体化する論証的スキーマは DIRE (「言う」) を含む (Benveniste 1966)。例として、感嘆文の記述 (Carel 2021, 2025) を見てみることにする。それによると、感嘆文の話者は、ある出来事を前にして「言うこと」(dire) を「奪われた」(arraché) ものとして、自身の発話活動を提示する⁵⁾。例えば、発話 *Que j'ai chaud !* (「なんて暑いんだ！」) の「示されている視点」は次のように記述される。

Point de vue manifesté, *j'ai chaud donc je dis « que j'ai chaud ! »*,
compris comme formulant « X » DC DIRE X⁶⁾

示されている視点。〈« X » DC X と言う〉の具体化として理解される「暑いので『なんて暑いんだ！』と言う」

前述のように、いわゆる発言動詞の規約的意味に含まれるスキーマは DIRE (「言う」) を含む。例えば、« X » DC DIRE X (〈« X » DC X と言う〉) は *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) の規約的意味に含まれる。スキーマ « X » DC DIRE X (〈« X » DC X と言う〉) は発話活動のトーンが「叫び」であることを明らかにする。一方、ディスコースは je dis を含んでいることから、発話活動のモードが「構想」であることを明らかにする。この例の話者は、「叫び」のトーンの下に発話活動に強く関わっている。

「発見」(mode du trouvé) はバンヴェニストの「イストワール」(histoire) に近いモードである (Benveniste 1966)。「構想」モードの話者である「私」(je) が「言う」ことで発話活動に強く関わるのに対して、「発見」モードの話者である「私」(je) は「言わない」ために発話活動に強く関わることはしない。例として、カレルによる 19 世紀フランスの高踏派の詩人ジョゼ＝マリア・ド・エレディア (José-Maria de Heredia) の詩の分析を見てみよう (Carel 2021, 2025)。高踏派はロマン主義への反動として、主観や感情の表現を禁じたことで知られている。下に引用する『日没』(*Soleil Couchant*) の冒頭は夕暮れの情景を描写している (下線は本稿の筆者による)。

Les ajoncs éclatants, parure du granit, / Dorent l'âpre sommet que
le couchant allume ; / Au loin brillante encor par sa barre d'écume /
La mer sans fin commence où la terre finit

(Heredia, *Soleil Couchant*, *Les Trophées*, p.106)

鮮やかなハリエニシダが岩肌を飾り、夕日に照らされた峻厳な山頂を黄金色に染める。遠くでは、今なお泡の列で輝きながら、果てしない海が大地の終わる場所で始まる。

(拙訳)

下線部における「示されている視点」は次のように記述される。

Point de vue manifesté, je regarde au-delà de l'âpre sommet donc je sais que la mer sans fin commence où la terre finit, compris comme formulant REGARDER DC SAVOIR

示されている視点。〈見る DC 知る〉の具体化として理解される「私は峻厳な山頂の向こうを見ているので、果てしない海が大地の終わる場所で始まるのを知っている」

ポイントは上記の「示されている視点」の内部に、すなわちディスコースにもスキーマにも「言う」が存在していないという点である。ディスコースに dire (「言う」) が含まれないことは発話モードが「発見」であることを明らかにする。これらの点において、この例の話者は発話活動

に強く関わることはしていない。スキーマ REGARDER DC SAVOIR (〈見る DC 知る〉) にも DIRE (「言う」) が現れていない。このスキーマはいわゆる発言動詞ではなく、むしろ語「観察する」(observer) の規約的意味に含まれると考えられる。このスキーマは、トーンが「観察」であることを明らかにする。この例の話者の発話活動は「言う」のではなく、「観察」している。

「受領」(mode du reçu) はデュクロのポリフォニー理論における「発話者」(énonciateur) の概念に着想を得たものである。「受領」は他者の「言うこと」が介入するという点で、「受領」モードの話者は「構想」モードの話者と比べて自身の発話活動に強く関わることはしない。発話モードが「受領」であることを明らかにするディスコースには je dis (「私は言う」) と il dit (「彼は言う」) が現れるとされた⁷⁾。例えば、発話 Pierre dit qu'il va faire beau, allons pique-niquer. (「ピエールが晴れると言っている、ピクニックに行こう。」) における「示されている視点」は次のように記述されていた (Carel & Ducrot 2014)。

Point de vue manifesté, *Pierre dit qu'il va faire beau donc je dis qu'il va faire beau, compris comme formulant X EST DIT DC DIRE X*

示されている視点。〈X と言われている DC X と言う〉の具体化として理解される「ピエールが晴れるだろうと言っているので私は晴れるだろうと言う」

スキーマ X EST DIT DC DIRE X (〈X と言われている DC X と言う〉) は動詞 reporter (「報告する」) の規約的意味に含まれると考えられる。このことはトーンが「報告」であることを明らかにする。さらに、論証的ディスコースは je dis (「私は言う」) と Pierre dit (「ピエールは言う」) とを含んでおり、モードが「受領」であることを明らかにする。しかしながら、カレルのより新しい論考では、この分析では「示されている視点」の内部に je dis (「私は言う」) が現れるため、「受領」が「構想」の特殊な一例として扱うことになってしまうとして、再解釈がされている (Carel 2025)。発話 Pierre dit qu'il va faire beau, allons pique-niquer. (「ピエールが晴れると言っている、ピクニックに行こう。」) における「示されている視点」はむしろ次のように記述されるべきだと言

う。

Point de vue manifesté. *Pierre pense qu'il va faire beau donc il dit qu'il va faire beau*, compris comme formulant PENSER DC DIRE

示されている視点。〈考える DC 言う〉の具体化として理解される「ピエールは晴れるだろうと思っているので彼は晴れるだろうと言う」

スキーマ PENSER DC DIRE (〈考える DC 言う〉) は動詞「言う」の規約的意味に含まれると考えられるが、ここで明らかにされているのは話者としての「私」(je) の発話活動ではなく、ピエール、つまり話者としての「第三者」(il) の発話活動である。さらなる研究を要すると断りつつも、カレルは「示されている視点」が「私」(je) 以外の話者の発話活動を明らかにすることもあると述べている。論証的ポリフォニー理論の創設は意味ブロック理論から約 20 年遅れており、論証的ポリフォニー理論は意味ブロック理論に比べて不安定なところが多い。また、将来的には諸概念を模式図等で示すことにより、理解の促進を図ることが求められるが、本稿の議論を進めるためには、ここで行った説明でひとまず十分であると思われる。なお、「受領」の概念については、本稿の最後で再び触れることにする。

2. アイロニカルでない感嘆文の話者と

アイロニカルな感嘆文の話者の発話活動の区別

2.1 問題

すでに述べたように、カレルは論証的ポリフォニー理論を用いて感嘆文の話者の発話活動を記述したが、アイロニーはしばしば感嘆文の形式を取る。例えば、大雨の日に *Quel beau temps !* (「なんていい天気だ!」) というような場合である。通常感嘆文の発話内容とアイロニカルな感嘆文の発話内容は、1. で述べたように、アイロニカルでない発話の「言われている視点」は「不合理なギャップ」を含まないが、アイロニカルな発話の「言われている視点」は「不合理なギャップ」を含む

ことによって説明できそうである。このことは、アイロニー発話の発話内容が言語的文脈あるいは非言語的文脈と矛盾をきたすという直観を説明する。

他方、通常の感嘆文の話者が内容を「言う」のに対して、アイロニカルな感嘆文の話者は内容を「言うふりをする」、つまり自らが信じていないことを言っているという直観は、論証的ポリフォニー理論の枠組みにおいて、どのように説明できるだろうか。Ducrot (2010) は初期の論証的ポリフォニー理論の枠組みで、上述したようなアイロニー発話の話者の発話活動の特徴を「自ら構想した内容を排除する（後続の談話・テキストの中で発展させない）」ものとして記述した。しかし、この分析には、アイロニー発話の内容があたかも後続の談話・テキストで発展させられているかのようにアイロニーが連続して用いられることがあるなどの反例（例えば「いい天気だ。太陽が輝いているね。絶好の外出日和だ。」）が存在するうえに（Nishiwaki 2025）、新しい論証的ポリフォニー理論では「排除」は話者の発話活動ではなく発話内容の構成に関わるものであるとされるため、これに従えば、アイロニー発話の話者は「構想」モードで発話するという特徴づけのみが維持されることになる。当然のことながら、これでは「言うふりをする」というアイロニー話者の発話活動を適切に記述できているとは言い難い。

2.2 仮説

まず、通常の感嘆文を記述してみることにする。朝、太郎が目を覚ましてカーテンを開けると、雲ひとつない晴天だったとする。その日、太郎は家族と出かける予定だとする。このとき、*Quel beau temps !*（「なんていい天気だ！」）と言う場合、この発話は通常の感嘆文として解釈されるのが普通だろう。話者は発言の内容を信じていると解釈される。論証的ポリフォニー理論による感嘆文の分析（Carel 2021, 2025）に従えば、この例の話者の発話活動は次のように記述可能である。

Point de vue manifesté. Il fait beau temps donc je dis « Quel beau temps ! », compris comme formulant X DC DIRE « X »

示されている視点。〈X DC « X 〉と言う〉の具体化として理解される「いい天気なので、『なんていい天気だ!』と言う」

一方で、発話の *Quel ... !* (「なんて…だ!」) という言語形式が語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) を指向 (pointer) する⁸⁾。語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) はその意味に含まれる論証的スキーマ *X DC DIRE « X »* (〈*X DC « X »* と言う〉) を表現する。他方で、発話の状況を鑑みると、発話 *« Quel beau temps ! »* (「なんていい天気だ!」) は論証的ディスコース *il fait beau temps donc je dis « Quel beau temps ! »* (「いい天気なので、『なんていい天気だ!』と言う」) を喚起する。論証的ディスコースは発話活動のモードが「構想」であることを明らかにする (ディスコースは *je dis* を含む)。論証的スキーマは発話活動のトーンが「叫び」もしくは「声を上げること」であることを明らかにする (スキーマは「叫ぶ」、「声を上げる」の規約的意味に含まれると目される)。さらに、論証的ディスコースと論証的スキーマを対照してみると、論証的ディスコースは論証的スキーマの合理的な具体化であり、論証的スキーマは論証的ディスコースの合理的な抽象化だと言える。ここでは、アイロニーの効果は感じられない。話者は内容を「言っている」。

それでは、アイロニカルな感嘆文ではどうだろうか。朝、太郎が目を覚ましてカーテンを開けると大雨が降っていたとする。その日、太郎は家族と出かける予定であるとする。このとき、*Quel beau temps !* (「なんていい天気だ!」) と言う場合、つまり、話者の太郎は「言うふりをしている」、つまり自らが信じていないことを言っているのだと解釈される。この発話はアイロニカルな感嘆文だと解釈されるのが普通だろう。本稿の筆者によれば、この例の話者の発話活動は次のように記述可能である。

Point de vue manifesté, il ne fait mauvais temps donc je dis « Quel beau temps ! », compris comme formulant X DC DIRE « X »

示されている視点。〈*X DC « X »* と言う〉の具体化として理解される「悪い天気なので、『なんていい天気だ!』と言う」

先ほどの例と同じく、ここでも発話の *Quel ... !* (「なんて…だ!」) という言語形式が語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) を指向する。語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) は、その意味に含まれる論証的ス

キーマ X DC DIRE « X » (〈X DC « X 〉と云う) を表現する。他方で、発話の状況を鑑みれば、ここでは発話 *Quel beau temps !* (「なんていい天気だ!」) は論証的ディスコース *il fait mauvais temps donc je dis « Quel beau temps ! »* (「悪い天気なので、『なんていい天気だ!』と云う) を喚起する。ここでも、論証的ディスコースは発話活動のモードが「構想」であることを明らかにする (ディスコースは *je dis* を含む)。また、論証的スキーマはトーンが「叫び」あるいは「声を上げること」であることを明らかにする (スキーマは「叫ぶ」、「声を上げる」の規約的意味に含まれると目される)。しかしながら、論証的スキーマ X DC DIRE « X » (〈X DC « X 〉と云う) と論証的ディスコース *il fait mauvais temps donc je dis « Quel beau temps ! »* (「悪い天気なので、『なんていい天気だ!』と云う) を比較すると、ここでは、両者の具体化・抽象化の関係には不合理性が認められる。スキーマの右辺 X に対応するはずのディスコースの右辺 *x* がむしろ *neg x* の形をとっている。つまり、*il fait beau temps* (「良い天気」) となるべきところが *il fait mauvais temps* (「悪い天気」) となっている。この現象は、Carel (2010) が「言われている視点」において観察した「不合理なギャップ」と同様のものである。この発話の「示されている視点」には「不合理なギャップ」が存在する。ここでは、アイロニーの効果が感じられる。話者は「言うふりをしている」存在、つまり自らが信じていない内容を言う存在として現れる。

考察をまとめよう。通常感嘆文の例もアイロニカルな感嘆文の例も論証的ディスコースが明らかにする発話活動のモードは「構想」、論証的スキーマが明らかにするトーンは「叫び」もしくは「声を上げること」である。両者の違いは通常感嘆文の例には「示されている視点」には「不合理なギャップ」が存在しないのに対し、アイロニカルな感嘆文の例には「示されている視点」には「不合理なギャップ」が存在するという点にある。通常感嘆文の話者は「叫び」のトーンの下に発話活動に強く関わるとすれば、アイロニカルな感嘆文の話者は「叫び」のトーンを明らかにするスキーマが「不合理なギャップ」を伴って具体化される「アイロニカルな叫び」のトーンの下に発話活動に強く関わると言える。単に「いい天気だ。」と云うよりも「なんていい天気だ!」と云った方がよりアイロニカルに感じられるのは、発話内容の性質のみならず、発話活動の性質も何らかのアイロニーの効果に関わっているから

だろう。これらのことにより、通常の感嘆文の話者は「言う」のに対し、アイロニカルな感嘆文の話者は「言うふりをする」という直観が説明される。

2.3 『アンドロマック』の例

以下、上述の仮説で実例を記述してみることとする。1. で引用したアンドロマックのアイロニカルな発話 *Digne objet de leur crainte !* は感嘆文の形式 (...!) である。この発話における「示されている視点」は次のように記述されると考えられる。

Point de vue manifesté, Astynax n'est pas digne objet de leur crainte donc je dis « Digne objet de leur crainte ! », compris comme formulant X DC DIRE « X »

示されている視点。〈X DC «X」と言う〉の具体化として理解される「アスティナクスはギリシャ人たちの不安の種に値しないので、『ギリシャ人の不安の種に値する!』と言う」

一方で、感嘆文の言語形式が (...!) 語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) を指向し、この語が規約的意味に含まれる論証的スキーマ X DC DIRE « X » (〈X DC «X」と言う〉) を表現する。他方で、文脈を考慮すれば発話は *Astynax n'est pas digne objet de leur crainte donc je dis « Digne objet de leur crainte ! »* (「アスティナクスはギリシャ人たちの不安の種に値しないので、『ギリシャ人の不安の種とは!』と言う」) といった論証的ディスコースを喚起する。スキーマは *s'exclamer* (「叫ぶ」) の規約的意味に含まれると考えられることから発話トーンが「叫び」であることを明らかにし、ディスコースは *je* を含むためモードが「構想」であることを明らかにする。ここで、論証的スキーマの右辺 X とそれに対応する論証的ディスコースの右辺 *x* を比べてみると、X が *neg x* の形で、すなわち本来 *digne objet de leur crainte* (「ギリシャ人の不安の種に値する」) となるべきところが *n'est pas digne objet de leur crainte* (「ギリシャ人の不安の種に値しない」) という形で肉付けされているのがわかる。この発話の「示されている視点」の内部には矛盾すなわち「不合理なギャップ」が存在する。アンドロマックは「叫び」のトーンを明ら

かにするスキーマを「不合理なギャップ」を伴って具体化する「アイロニカルな叫び」のトーンの下に発話活動に強く関わっている。

2.4 『花咲く乙女たちのかげに』の例 (1)

次に引用するのは、マルセル・プルースト (Marcel Proust) による『花咲く乙女たちのかげに』 (*À l'ombre des jeunes filles en fleurs*) の一部である (下線部は本稿の筆者による)。主人公である「語り手」は芸術に造詣のあるパリ社交界の寵児スワン、そして、スワンの妻で元高級娼婦のオデットと親交が深い。「語り手」の父親は「語り手」の交友関係を快く思っていない。また「語り手」は文学に関心をもつが、父親は「語り手」が外交官になることを願っている。ある日、父親はスワンが作家のベルゴットに「語り手」を紹介したと聞いて大声を出す。

« Swann t'a présenté à Bergotte ? Excellente connaissance, charmante relation ! (...) Mon pauvre fils, tu n'avais pas déjà beaucoup de sens commun, je suis désolé de te voir tomber dans un milieu qui va achever de te détraquer.»

(Proust, *À l'ombre des jeunes filles en fleurs*, p. 143)

「スワンがお前をベルゴットに紹介したって？ そりゃ、立派な知り合いだね、結構なつき合いだ！ (…) 以前からお前には十分な常識がなかった。お前があんな環境にひきずり込まれて、すっかりダメになるかと思うと悲しいよ」

(吉川一義訳『失われた時を求めて3 花咲く乙女たちのかげにI』p. 323)

下線部の発話 *Excellente connaissance, charmante relation !* (「そりゃ、立派な知り合いだね、結構なつき合いだ！」) に注目しよう。発話の形式 (...!) は感嘆文のそれである。とはいえ、下線部の発話は通常の感嘆文ではなく、アイロニカルな感嘆文として解釈されるのが普通だろう。前後の文脈から父親が「語り手」の交友関係に不満を持っていることは明らかである。また、この発話は、ヴィルギュル (.) で繋がれた2つの名詞句からなるが、その両方ともがアイロニーだと解釈されよう。この発話の「示されている視点」は次のように記述できるだろう。

Point de vue manifesté, *ce n'est pas une excellente connaissance donc je dis « Excellente connaissance ! »*, compris comme formulant X DC DIRE « X »

示されている視点。〈X DC « X 〉 と言う〉の具体化として理解される「立派な知り合いではないので『立派な知り合いだね!』と言う」

Point de vue manifesté, *ce n'est pas une charmante relation donc je dis « Charmante relation ! »*, compris comme formulant X DC DIRE « X »
示されている視点。〈X DC « X 〉 と言う〉の具体化として理解される「不適切な付き合いなので『結構な付き合いだ!』と言う」

一方で、発話の感嘆文の形式 (...!) は語「叫ぶ」もしくは語「声を上げる」を志向する。語「叫ぶ」もしくは語「声を上げる」はその規約的意味に含まれる論証的スキーマ X DC DIRE « X » (〈X DC « X 〉 と言う) を表現する。他方で、文脈を鑑みれば、下線部の発話は論証的ディスコース *ce n'est pas une excellente connaissance, donc je dis « Excellente connaissance ! »* (「立派な知り合いではないので、『立派な知り合いだね!』と言う」) と *ce n'est pas une charmante relation donc je dis « Charmante relation ! »* (「不適切な付き合いなので『結構な付き合いだ!』と言う」) とを喚起する。論証的ディスコースは *je dis* (「私は言う」) を含み、発話モードが「構想」であることを明らかにする。論証的スキーマは「叫ぶ」あるいは「声を上げる」によって表現されていると考えられ、発話トーンが「叫び」あるいは「声を上げること」であることを明らかにする。ここで、論証的スキーマと論証的ディスコースを対比すると、スキーマ X DC DIRE « X » (〈X DC « X 〉 と言う) の右辺 X に対応するはずのディスコースの右辺 *x* がむしろ *neg x* の形式をとっていることに気づく。つまり、*c'est une excellente connaissance* (「立派な知り合い」) となるべきところが *ce n'est pas une excellente connaissance* (「立派ではない知り合い」) となっている。同様に、*c'est une charmante relation* (「結構な付き合い」) となるべきところが *ce n'est pas une charmante relation* (「不適切な付き合い」) となっている。この発話の「示されている視点」を構成するスキーマとディスコースの間には「不合理なギャップ」が存在する。通常の感嘆文の話者は「叫び」のトーンの下に発話活動に強く

関わると考えられるが、「語り手」の父親、つまりこの発話における話者は「叫び」のトーンを明らかにするスキーマを「不合理なギャップ」を含むディスコースで具体化する「アイロニカルな叫び」のトーンの下に発話活動に強く関わっていると言える。

2.5 『花咲く乙女たちの影に』の例 (2)

次の例も『花咲く乙女たちのかげに』からとったものである（下線は本稿の筆者による）。名門貴族ゲルマント家出身で芸術への造詣が深いヴィルパリジ夫人は、主人公である「語り手」の前で文学批評を展開する。話題の中心は19世紀の作家、劇作家、詩人でフランス・ロマン主義の四大詩人にも数えられるアルフレッド・ド・ヴィニー（Alfred de Vigny）である。

« Celui qui disait : “Je suis le “comte Alfred de Vigny.” On est comte ou on n’est pas comte, ça n’a aucune espèce d’importance. (...) D’abord je ne suis pas sûre qu’il le fût, et il était en tout cas de très petite souche, ce monsieur qui a parlé dans ses vers de son “cimier de gentilhomme.” Comme c’est de bon goût et comme c’est intéressant pour le lecteur ! C’est comme Musset, simple bourgeois de Paris, qui disait emphatiquement : “L’épervier d’or dont mon casque est armé.” Jamais un vrai grand seigneur ne dit de ces choses-là. Au moins Musset avait du talent comme poète. Mais à part *Cinq-Mars* je n’ai jamais rien pu lire de M. de Vigny, l’ennui me fait tomber le livre des mains (...) ».

(Proust, *À l’ombre des jeunes filles en fleurs*, p. 298-299)

「ああ、あの『小生はアルフレッド・ド・ヴィニー伯爵です』っておっしゃった人ですね。伯爵であろうと伯爵でなかろうと、そんなことはちっとも重要ではありませんのに。(…) そもそも本当に伯爵でいらしたかどうかなど私には確信がもてません。いずれにしてもごく小さな家柄の出でしょう、なにせご自分の詩句で『わが貴族の兜の前立て』なんて吹聴する人ですから。いいご趣味ですわね、読者はさぞ興味津々でございましょう！ 一介のパリのブルジョワにすぎないミュッセが仰々しく『我が兜に飾られし金のハヤブサ』

なんて書いていたのと同類ですわね。正真正銘の大貴族は決してこんなことは言いません。まあ少なくともミュッセには詩人としての才能がありました。でも『サン・マール』をべつにすると、私にはヴィニーさんのものはなにひとつ読めたためしがありませんの、退屈で手が本から落ちてしまうんです。(…)

(吉川一義訳『失われた時を求めて 4 花咲く乙女たちのかげにⅡ』 p. 188)

引用の下線部に注目しよう。下線部の発話は *Comme...!* (「なんて…だ!」) という感嘆文の形式をもつ。前後の文脈からヴィルバリジ夫人はヴィニーの作品を高く評価していないことは明らかである。この発話はアイロニカルな感嘆文だと判断されるのが普通だろう。また、この発話は *et* (「と」、「そして」) で結ばれた2つの節 (*comme c'est de bon goût* (「いいご趣味ですわね」) と *comme c'est intéressant pour le lecteur* 「読者はさぞ興味津々でしょう」) からなるが、両者ともにアイロニーだと解釈されよう。文脈を踏まえれば、下線部の発話の「示されている視点」は次のように記述できるだろう。

Point de vue manifesté, ce n'est pas de bon goût donc je dis « Comme c'est de bon goût ! », compris comme formulant X DC DIRE « X »

示されている視点。〈X DC « X » と言う〉の具体化として理解される「悪趣味なので、『いいご趣味ですわね!』と言う」

Point de vue manifesté, ce n'est pas intéressant pour le locuteur donc je dis « Comme c'est intéressant pour le locuteur ! », compris comme formulant X DC DIRE « X »

示されている視点。〈X DC « X » と言う〉の具体化として理解される「読者はさぞ退屈だろうから、『読者はさぞ興味津々でございましょう!』と言う」

一方で、*Comme...!* (「なんて…だ!」) という言語形式が語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) を指向し、「叫ぶ」あるいは「声を上げる」の規約的意味に含まれるスキーマ 〈X DC « X » と言う〉を表現する。他方で、発話は論証的ディスコース *ce n'est pas de bon goût donc je dis*

« *Comme c'est de bon goût !* » (「悪趣味なので、『いいご趣味ですわね!』
 と言う」) と *ce n'est pas intéressant pour le locuteur donc je dis « Comme
 c'est intéressant pour le locuteur ! »* (「読者はさぞ退屈だろうから、『読者
 はさぞ興味津々でございましょう!』と言う」) とを喚起する。論証的
 スキーマは語 *s'exclamer* (「叫ぶ」、「声を上げる」) によって表現され、
 発話トーンが「叫び」もしくは「声をあげること」であることを明らかに
 にする。論証的ディスコースは *je dis* (「私は言う」) を含み、発話モー
 ドが「構想」であることを明らかにする。ここで、論証的スキーマと論
 証的ディスコースを対照してみると、スキーマ *X DC DIRE « X »* の右
 辺 *X* に対応するはずのディスコースの右边が *x* ではなくむしろ *neg x* の
 形式をもっていることに気づく。つまり、*c'est du bon goût* (「いい趣味」)
 となるべきところが *ce n'est pas du bon goût* (「悪趣味」) に、*c'est
 intéressant pour le lecteur* (「読者は興味津々」) となるべきところが *ce
 n'est pas intéressant pour le lecteur* (「読者は退屈」) になっている。下線
 部の発話の「示されている視点」の内部、すなわち論証的スキーマと論
 証的ディスコースの間には「不合理なギャップ」が存在する。この発話
 は *et* (「と」、「そして」) で結ばれた2つの節 (*comme c'est de bon
 goût* (「いいご趣味ですわね」) と *comme c'est intéressant pour le
 lecteur* (「読者はさぞ興味津々でしょう」) からなるが、2つの節に対応
 する「示されている視点」はそれぞれ「不合理なギャップ」を含んでい
 る。2つの節はいずれもアイロニカルに解釈される。通常の感嘆文の話
 者が「叫び」のトーンの下に発話活動に強く関わるのに対して、ヴィル
 バリジ夫人、すなわちここで問題となっている発話の話者は「叫び」の
 トーンを明らかにするスキーマを「不合理なギャップ」を伴うディス
 コースで具体化する「アイロニカルな叫び」のトーンの下に発話活動に
 強く関わっている。

3. 結語

ここまで、現行版の論証的ポリフォニー理論を紹介したうえで、それ
 に依拠しながら、通常の感嘆文の話者とアイロニカルな感嘆文の話者の
 発話活動の区別について考察してきた。意味ブロック理論では「言われ
 ている視点」における「ギャップ」の一例として、言語的あるいは非言

語的文脈と矛盾をきたすというアイロニーの発話内容を扱う。本稿で示した分析が正しければ、論証的ポリフォニー理論では「示されている視点」における「ギャップ」の一例として、「言うふり」をする、つまり信じていない内容を言うというアイロニーの話者の発話活動を扱えるようになるかもしれない。ただし、分析の一般化に向けては多様なコーパスを用い、より多くの事例の観察に基づいた考察とより詳細な議論が必要であることは言うまでもない。むすびにかえて、重要だと思われる問題を1点のみ指摘しておく。

アイロニーはしばしば感嘆文の形式を取るが、すべてのアイロニーが感嘆文であるわけではない。本稿では感嘆文の形式のアイロニーのみを扱ったが、感嘆文の形式を取らないアイロニーの「示されている視点」にも「不合理なギャップ」は存在するだろうか。例えば、プルーストの『ソドムとゴモラ』(*Sodome et Gomorrhe*)の一部を見てみよう(イタリックと傍点は原文のまま、下線部は本稿の筆者による)。かつて、画家のエルスチールはヴェルデュラン夫人のサロンに出入りしていた。当時、ヴェルデュラン夫人はエルスチールの才能を認めていたが、エルスチールの女性関係が気に入らなかった。ある日、エルスチールが娼婦を恋人にすると、ヴェルデュラン夫人は2人の仲を割こうとした。しかしエルスチールは娼婦と結婚し、ヴェルデュラン夫人と縁を切ってサロンに来ることはなくなった。いまやヴェルデュラン夫人はエルスチールとその画を嫌っている。ヴェルデュラン夫人は言う。

« Du jour où il a quitté le petit noyau, ça a été un homme fini. Il paraît que mes dîners lui faisaient perdre du temps, que je nuisais au développement de son génie. (...) »

(Proust, *Sodome et Gomorrhe*, p. 943)

「この小派閥を離れた日から、あの人は終わっちゃいましたね。わたくしの晩餐があの人には時間の無駄になり、わたくしがあの人
の天才をのばす邪魔になったそうでございます。(…)」

(吉川一義訳『失われた時を求めて9 ソドムとゴモラⅡ』p. 216)

引用の下線部に注目しよう。下線部の発話が感嘆文でないことは明白である。また、この発話はアイロニカルに解釈される可能性がある。

Sperber & Wilson (1978) は、他者の発話を解離的な態度を伴って引用することで、アイロニーが生まれると指摘した（例えば、天気予報で「今日はいい天気になりそうです」と言っていたのを聞いて、ピクニックに出かけたところ、大雨が降ってきて「確かに今日はいい天気だなあ」と皮肉を言うような場合）。ヴェルデュラン夫人の例は、このケースに当たると思われる。il paraît que（「～という噂だ」）の存在は、発話が引用であることを示している。さらに、il paraît que（「～という噂だ」）の補文の内容 mes diners lui faisaient perdre du temps（「わたくしの晩餐会があの人には時間の無駄になり」）、je nuisais au développement de son génie（「私があの人をのばす邪魔になった」）にヴェルデュラン夫人が賛同していないことは、状況や下線部の発話の前文を考慮すれば、明らかである。また、単に「わたくしの晩餐会があの人には時間の無駄になり、わたくしがあの人をのばす邪魔になったのでございます。」と言うよりも「わたくしの晩餐会があの人には時間の無駄になり、わたくしがあの人をのばす邪魔になったのでございます。」と言った方がよりアイロニカルに感じられるとすれば、発話内容のみならず il paraît que（「～という噂だ」）の存在も何らかのアイロニーの効果に関わっていると言えそうである。感嘆文の形式のアイロニーと同様に、引用を利用するタイプのアイロニーにおける「示されている視点」の内部にも「不合理なギャップ」は存在するのだろうか。発話モード、発話トーンはそれぞれどのようなものだろうか。また、喚起される論証的ディスコースは je（「私」）の発話活動に関わるものだろうか。それとも、il（「第三者」）のそれに関わるものだろうか。あるいは、その両方、つまり je（「私」）に関わるディスコースと il（「第三者」）に関わるディスコースの2つが喚起されるのかもしれない。いずれにせよ、引用形式のアイロニーには他者の発言が介入するため、「受領」モードとの関連が予想される。

しかしながら 1.3 ですでに述べたように Carel (2025) において「受領」の新たな性質づけが示唆されたことで、「受領」の定義そのものが揺らいでいる。まずは「受領」について Carel (2025) の提言を精査し、「受領」の定義そのものを再検討する必要があるだろう。新たな記述では、「受領」モードの一例、つまり il dit que p（「彼は p と言う」）の形式の発話が喚起するのは je（「私」）の発話活動に関わる「示されている

視点」ではなくむしろ、il（「第三者」）の発話活動に関わる「示されている視点」であったとして、「示されている視点」の中にはje（「私」）以外の発話活動に関わるものも存在するのだとされた。では、「受領」モードを明らかにする「示されている視点」は常にil（「第三者」）の発話活動に関わり、je（「私」）の発話活動には関わらないのだろうか。それとも「受領」モードを明らかにする「示されている視点」においては2つのケース、すなわちje（「私」）の発話活動に関わる「示されている視点」が喚起される場合とil（「第三者」）の発話活動に関わる「示されている視点」が喚起される場合を区別すべきだろうか。もしくは、「受領」はje（「私」）に関わる「示されている視点」とil（「第三者」）に関わる「示されている視点」の双方を常に喚起するモードとして特徴づけられるかもしれない。あるいは、これら双方が喚起されるケースとje（「私」）の発話活動に関わる「示されている視点」のみが喚起されるケース、il（「第三者」）に関わる「示されている視点」のみが喚起されるケースが存在するのかもしれない。また、フランス語のilは2人称単数主語としての用法（例えばil dit que p「彼はpと言う」）と英語の仮主語itに相当する非人称主語としての用法（例えばil paraît que p「pという噂だ」）とを持つが、前者と後者におけるil（「第三者」）はどのように区別すればよいだろうか。さらに、il（「第三者」）の発話活動に関わる「示されている視点」を喚起するのであれば、tu dis que p（「君はpと言う」）はtu（「君」）の発話活動に関わる「示されている視点」を喚起するのではないか。これらの点を明確にしていくことで、il（「第三者」）やtu（「君」）といったje（「私」）以外の話者の発話活動も論証的ポリフォニー理論の射程に収めることが可能になるだろう。

注

- 1) 「ポリフォニー」(polyphonie) とはミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtine) の文学理論から着想を得たもので、Ducrot (1984) は複数の「発話者」(énonciateur) を登場させる (mettre en scène) ことで発話活動を記述した。
- 2) 初期の論証的ポリフォニー理論に関わる日本語論文として、次のものなどがある。喜田 (2012a, 2012b)、大久保 (2013, 2016)、渡邊 (2015)、西脇 (2016, 2017)。現行版については、西脇 (2022, 2026)、喜田 (2025) にわずかな紹介があるに過ぎない。なお、これらの論考の一部は論証意味

論のサイト (<https://semanticar.hypotheses.org>) で読むことができる。

- 3) 以下、特に断りがない場合、「論証的ポリフォニー理論」を「Carel & Ducrot (2014) 以降の現行版の論証的ポリフォニー理論」という意味で用いることにする。
- 4) 話者と発言主体は一致する場合が多いが、常にそうだとは限らない。例えば、レストランで食事をしていた女性が従業員に車の中で待っている犬を店内に連れてきていいか聞いたとする。従業員が犬を連れてきてもいいと答えたとする。女性は犬を連れてレストランに戻ってきて、Je m'appelle Geoffrey. (「私の名前はジェオフレです。」) と言ったとする。この発話の発言主体 (= 実際に発話をする人物) は女性である。話者 (= 発話の責任者) は犬である (発話において Je が指しているのは犬)。
- 5) 「言うこと」(dire) が「奪われた」(arraché) というカレルの表現の理解は容易ではないが、ある出来事について何らかの思索を加えたりせず、その出来事に対して、ただ単に声を上げているというような意味に解されるのではないか。
- 6) J'ai chaud ! (「暑い!」) のようなタイプの感嘆文は X DC DIRE « X » (〈X DC « X » と言う) の具体化として理解される「暑いので『暑い!』と言う」を喚起する。エクスクラメーションマークを除けば、スキーマ X DC DIRE « X » (〈X DC « X » と言う) における X と DIRE « X » の « X » は一致する。同様に Que j'ai chaud ! (「なんて暑いんだ!」) のようなタイプの感嘆文は 〈X DC DIRE « X »〉の具体化として理解される「暑いので『なんて暑いんだ!』と言う」を喚起する。エクスクラメーションマークと「なんて〜だ!」を除けば、スキーマ X DC DIRE « X » (〈X DC « X » と言う) における X と DIRE « X » の « X » は一致する。このような要領でスキーマにおける X の使用を理解してほしい。
- 7) ここでの il は「彼」そのものを意味するのではなく、話者以外の存在 (この例では Pierre) を代表する表現として用いられているものとして理解してほしい。
- 8) 「指向する」(pointer) とは、発話や前後の文脈に言語的に現れていない語によってスキーマが表現されるプロセスのことであり、厳密に言えば、「論証的解説」に属する現象だが、上述したように本稿では「論証的解説」と「論証的解釈」の区別については考慮しないものとする。

参考文献

- Anscombre, J.-C. (1995) « Topique or not topique: Formes topiques intrinsèques et forms topiques extrinsèques », *Journal of Pragmatics* 24, p. 115-141.
- Anscombre, J.C. & O. Ducrot (1983) *L'Argumentation dans la langue*, Bruxelles

- : Mardaga.
- Austin, J.L. (1975) *How to Do Things with Words: Second Edition (The William James Lectures)*, Harvard University Press.
- Benveniste, E. (1966) *Problèmes de linguistique générale*, I, Paris : Éditions Gallimard.
- Benveniste, E. (1967) *Problèmes de linguistique générale*, II, Paris : Éditions Gallimard.
- Carel, M. (1992) « Vers une formalisation de la théorie de “l’argumentation dans la langue” », thèse de troisième cycle, EHESS.
- Carel, M. (2010) « Ironie, paradoxe et humour », dans Maria-Dolorès Vivero García (ed) *Humour et crises sociales. Regard croisés France-Espagne*, Paris : L’Harmattan, p. 57-75.
- Carel, M. (2021) « L’énonciation linguistique : fonctions textuelles, modes énonciatifs, et argumentations énonciatives », dans L. Behe, M. Carel, C. Denuc, J. C. Machado (éds) *Cours de Sémantique Argumentative*, São Carlos : Pedro & João editores, p. 349-371.
- Carel, M. (2025) « Énonciation et vouloir », *Linguisticae Investigationes* 48, p.103-128.
- Carel, M & O. Ducrot (2009) « Mise au point sur la polyphonie », *Langue Française* 164, p. 33-44.
- Carel, M & O. Ducrot (2014) « Pour une analyse argumentative globale du sens », *Arena Romanistica* 14, p. 72-88
- Ducrot, O. (1984) *Le Dire et le dit*, Paris : Les Éditions de Minuit.
- Ducrot, O. (1988) « Topoi et formes topiques », *Bulletin d’études de linguistique française* 22, p. 1-14.
- Ducrot, O. (2010) « Ironie et négation », dans V. Atayan et U. Wienen (éds) *Ironie et un peu plus*, Frankfurt am Main : Peter Lang, p. 169-181.
- Nishiwaki, S. (2025) « L’ironie dans la sémantique argumentative », *SCRIPTA* 66, p. 182-216.
- Sperber, D. & D. Wilson (1978) « Les ironies comme mentions », *Poétique* 36, p. 399-412.
- 大久保朝憲 (2014) 「論証的ポリフォニー理論による緩叙法・婉曲語法の分析」『日本語用論学会第16回大会発表論文集』9, p. 17-24.
- 大久保朝憲 (2016) 「アイロニー・からかい・緩叙法・婉曲語法」、東郷雄二・春木仁孝 (編) 『フランス語学の最前線4』 ひつじ書房, p. 303-339.
- 喜田浩平 (2012a) 「論証とポリフォニーの意味論」、『藝文研究』103, p. 212-227.
- 喜田浩平 (2012b) 「『発話者』から『トーン』へ」、喜田浩平 (編) 『川口順二

- 教授退任記念論集』Web 出版、p. 81-88.
- 喜田浩平 (2025) 「はじめての論証意味論」、『藝文研究』129、p. 69-84.
- 西脇沙織 (2016) 「アイロニー発話の意味の性質」、『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』21、p. 33-49.
- 西脇沙織 (2017) 「アイロニー発話の『トーン』」、『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』22、p. 110-126.
- 西脇沙織 (2022) 「Behe, L., M. Carel, C. Denuc & J. Cesar Machado (dir) (2021), *Cours de sémantique argumentative*, Pedro & João editores.」、『フランス語学研究』56、p. 75-76.
- 西脇沙織 (2026) 『論証意味論入門』ひつじ書房
- 渡邊淳也 (2015) 「論証的ポリフォニー理論をめぐって」、川口順二 (編) 『フランス語学の最前線 3』ひつじ書房、p. 275-304.
- フレーゲ G. 著、藤村龍雄訳 (2017) 『フレーゲ哲学論集』岩波書店

コーパス

- Heredia, J.-M. de (1893/2015) *Les Trophées*, Charon-sur Saône : Éditions Ligarán
- Proust, M. (1919/1997) *À l'ombre des jeunes filles en fleurs*, Paris : Éditions Gallimard.
- Proust, M. (1922/1954) « Sodome et Gomorrhe », *À la recherche du temps perdu* IV, Paris : Éditions Gallimard.
- Racine, J. (1667/1994) *Andromaque*, Paris : Éditions Gallimard.
- ブルースト作、吉川一義訳 (2011) 『失われた時を求めて 3 花咲く乙女たちのかげに I』岩波文庫
- ブルースト作、吉川一義訳 (2012) 『失われた時を求めて 4 花咲く乙女たちのかげに II』岩波文庫
- ブルースト作、吉川一義訳 (2015) 『失われた時を求めて 9 ソドムとゴモラ II』岩波文庫
- ラシヌ作、渡辺守章訳 (1993) 『フェードル アンドロマック』岩波文庫